

二人が登った先は人気のない小部屋だった。古ぼけた武器や調度品の転がる詰所らしき空間。手入れされていない武具は凡そ実用に値しないだろうが、寝台等はまだ使えそうに思われた。とは云え、由海を攫われた二人にとってこの場でのんびり休んでいる余裕はない。地下通路への道を塞ぐレバーが崩れた棚の裏側にあったのを確かめ、これを利用して道を塞いだ。誰かが同じ道を辿って来る可能性はあったが、あの様な場所に通じる道を開けっぱなしにしておくことは英一にしる奏美にしる到底容認出来なかった。床が閉じられ、一見しただけでは何もない空間に変わる。非常用の隠し通路の行き着いた先がこの様な場所であるなら、ここは恐らく目的の城郭の中なのだろう。この城の中に、月子が言っていた謎めいたマシンがあつてこの狂気の空間から脱出出来るのだろうか？ 英一には分からなかったが、今はそれが何かに繋がるかと信じた。

「ねえ英一くん、これ……何かに使えたりするかな？」

奏美が崩れたものの中から取り出したものはロープの一塊だった。使えるような、使えないような。英一にはすぐさまの使途が思い浮かばなかったが、邪魔にならない範囲ではあつて損もあるまいかと思われた。それで英一がそれを持っておくことにした。いざ戦いになったら鋸を両手持ちする時に邪魔だが、刈り取り鎌と折れた角材を抱える奏美にこれ以上無駄な荷物を持たせるのも彼女の体力に差し障ると思われた。

部屋を出た先は通路で、左右に延びている。右手に抜けてすぐには十字路があり片側には視認出来る大きな門があつた。これは正門と云うところであり、するとそちらが南側になるのだろう。門自体は錆び付いたままに開け放たれているが、鉄格子が下りており外部との行き来を阻害している。だがこの場合むしろあれのお陰で外から妙なものがやって来なくて済むのだろうと英一には思われた。ただ、仮にあちから見知った誰かしらがやって来たならばあの鉄格子を上げてやらねば入ることも出来るまい。その時が来ればいいのか来ない方がいいのか、地下通路を経た後では奏美の様な善良な人格でも手放しに賛成し難そうに思われた。右手を真っ直ぐ進もうとすると程なくして瓦礫が崩れて塞がれており、十字路の北側は大きな扉が固く閉じられていた為進めなかった。

二人は左、通路を西に進んだ。西への廊下には幾つか部屋があり、それらを慎重に確認していったが、扉の開かなかつた部屋以外には目立つものは見当たらなかった。ただ白骨化した死体が幾つか転がっているだけの年月を経た無人の部屋ばかりが立ち並び、その薄ら寒さは如何にも廃城と思わせたがさしもの二人もいい加減不気味な場所には慣れを伴っており、探索は淡々と進んだ。問題はどちらかと云うとまた日が暮れつつあると云うことと、水以外の食べ物に乏しいと云うことだった。

「これ……この人……」

廊下を曲がつて北に進んだ辺りに転がっていた屍はまだ比較的新しかった。新しいと云つても死後長く放置されて死肉は朽ちており纏った衣服も褪せてボロボロではあつたが、この城や廃市街で見た原型さえ留めていない衣服や見慣れない民族服めいたものらしきものを纏っていたものとは違って彼らの日常世界で見かける範囲のカジュアルな服装だった。ああ、慣れとは実に忌まわしいものだ。英一は無言で屈んでその屍の衣服とボーチを探った。未開封のままだが中身が潰れていると思しきビスケットの袋が見つかり、それを見て少しばかり二人は安堵した。同時に、食べ残したままに命を落とした持ち主に対しそれを拝借して行くことへの申し訳なさも抱かれた。

「ごめんなさい、わたしたちも困っているから……貰わせて下さい」

こんな風に善良さ・優しさから故人に詫げる奏美。英一とて無感情に持ち去って食べておしまいと云う気にはなれないものだが、それはそれとして考える。差し当たりこの故人は城内に到達したと云うことだ。あの化け物の徘徊する森や廃市街、地下通路等を抜けて何らかの方法でこの城内まで。或いはひょっとしたら元々この城内にやって来てしまひ、そのまま何らかの理由で落命したと云うこと

もあるかもしれない。自分たちはトンネルを抜けた先がここだった訳だが、教授を探しに出て以来音沙汰の無いままの兼輔が語ったところによればキャンプの帰りに車が霧に包まれた、と云うことなので文脈的に同じトンネルをくぐったとは確定出来ない。もし全くの個人が何らかの理由でこの辺りに迷い込んだとして、その到達先が何故か城内またはその近辺だった、と云うことも考えられなくはないだろう。この一帯は本当に訳の分からないファンタジーの如き要素が自分たちの生活している世界に干渉を掛けているのではあるまいか？

「英一くん？」

「ああ、悪い……少し別のことを考えてた」

「そっか。後でいいから、教えて。何か気付けることもあるかもしれないから」

「あ……うん」

「小春ちゃんの分も、楚さんが帰って来るまでの分もわたしが頑張らなくちゃいけないから、ね」

氣負うことの陰しさを示しながらも奏美が英一に小さく笑みを投げ掛けた。むしろ努めて彼女は微笑んで、英一を鼓舞しようとしているのだ。それをどことなく察した英一は小さく頷き返して、頭の中で自分の頬を軽く叩く仕草を思い浮かべた。

由海はどこにいいのか、と云うのを考える時順当に予想するなら地下通路内に囚われているのだろうと二人には思われる。一方で自分たちが通って来た通路からは辿り着けない場所へ連れ去られた以上別の道から探さねばならない。お世辞にも再び潜りたい場所などではないが。では、そうした別の入り口はこの城内のどこにあるのだろうか？ 差し当たり自分たちが上がって来た詰所の反対側に同じ様な場所があるのではないかと、英一がまず考え、奏美もそれに賛同して大回りして到達出来るかを確かめる。北に進んだ通路の突き当たりには開かれたままの扉と、上へも下へも移れる階段があった。突き当たりの右はまた長い廊下が続いているがその右手の壁側には二つ扉が見える。仮に城の構造が左右対称に造られているのなら、自分たちが昇って来た部屋と対応する部屋が存在し、またそこにも同じ様な通路があるのではないかと思われる。それで二人はこのまま大回りして東側を目指した。東に進んだ突き当たりからの光景も西側と概ね同様のものであったので、二人は真っ直ぐさらに南、そこからまた突き当りを西に進むと瓦礫で塞がった通路の手前に部屋が設けられていた。左手の、南側の部屋を二人はそうして調べた。しかしそこは鍵が掛かって閉ざされており二人にはどうしようもなかった。已む無く二人は来た道に戻り、北側に存在する昇降階段から地下に降ってみることにした。明かりなど灯っている筈もない地下。……おかしいことに壁に設えられたランプには不気味な灯が辺りを仄明るく照らしておりライトの必要性は乏しそうだと思われた。地下は丁字路を成しており南側へ進む通路の左右と正面に幾つかの扉があった。だがいずれの扉も鍵が掛かっているらしく開かない。人気のない通路の不気味な灯の下をこつんこつんと足音を鳴らしながら歩いた二人はここまで来て徒労かと思われたが、向かって左手の一番南にある扉は扉自体がひどく痛んでおり少し衝撃を与えれば壊せるのではないかと思われた。そこで英一が力一杯体当たりを叩き込んだところ、見事に扉諸共突き抜けて彼は部屋に転がり込んだ。

「英一くん！」

「げほっ、げほっ……いや、大丈夫」

中は扉の傷み具合に比して荒れていたが、見る限り地下の宿直部屋の様に思われた。だがそれより二人の目を惹いたのは部屋の片隅にある本棚が動かされた形跡と共にその壁に不気味な通路が通っていたことで、恐らくこれもまたあの地下通路に潜る経路の一つなのだろうと思われた。果たして、と思いつつも二人はそこを進み再び地下通路へと下って行く。

た。そしてそこに佇む影を見る。緊張が走るのを英一は感じた。

「おっそ。どんだけ回り道して来たのよ。あいつ捕まえてるのも飽きちゃったから捨てちゃったわあ」

顔の崩れた百香らしき影が振り返りながらそう言った。英一は怒りさえ感じ、最早論駁の必要性も抱かなかった。雄叫びを上げて飛び掛かり、鋸を叩き込む。嫌な肉感黒い影を引き裂くことで消え、辺りにはその哄笑が残った。……英一は足元を見た。影が、血溜まりの様にそこに潰れ、しかし嫌な音を立てて沸き立ち始める。英一は奏美を見て逃げろ、と叫んだ。二人は一目散に走り出す。後ろから何かが生じて、その後を追う足音が聞こえた。

二人は走り続け、その気配が消えるまで休めなかった。それが漸く後をもう追って来ないと感じられた後に二人は少しだけ息を整え、再び城へ戻ることを目指した。今度は英一がなるべく経路を覚えていた為にあまり迷うことなく元々通った進入口から城の地下へと戻るに至った。

「ねえ英一くん、こっち、まだ扉あるよね」

奏美が宿直部屋で南側の扉を指し示す。よく見るとそれは開かれたままになっている。誰かが通ったと云うことだろうかと思いつつ二人は扉からその先を覗き込んだが、そこには本棚が立ち並んでいる以外目立ったものは何も見当たらない。どうやら書庫らしいが、そこにある本に書かれた文字は専ら二人には読めないものである。書庫には誰かがいたらしい形跡が見られたが、二人にはそれがいつ・誰のものであるかを判別する術はなかった。他に目下目ぼしいものは見つからず、二人は地下を出て二階へ上ることにした。由海の行方は未だに分からぬまま。あの百香の様な何かの語るところを信じるなら捨てられたと云うことだが、あの構造も分からぬ地下通路を闇雲に探し歩くことは自殺行為以外の何物でもなく、二人は由海と城内で再会出来ると信じるよりほかなかった。

二階は一階にまして明るく感じられたが、これはベランダに通じているからだ。この階のベランダは外壁からせり出して一帯を見下ろせるように築かれており、部屋の一つに武器庫の跡らしきものがあるが、弓の残骸等が転がっていたのを思うと、壁面の狭間と併せて外敵を射落とす為の防衛目的であることが読み取られた。二人は西の外壁部から眺望しながらその様に考察したのだが、そこで誰かの叫び声が聞こえた。

「これ……るいちゃんと百香ちゃんだ!」

「何だって!」

その声は城外より聞こえた様に思われ、二人は南側へと急いだ。辿り着いた眺望より見下ろした先に見たものに二人は息を呑んだ。《捕食者》がいる。そしてその餌食にされまいと必死に城へ続く階段を登る累と百香の姿も。

「るいちゃん、百香ちゃん!!」

「あ……瀬之川先輩!」

「奏美なの!」 た、助けて、このままじゃあいつに追い付かれる!!」

「でも城門は鉄格子が下りてるままだ!」

「どうにかしないと!」

しかし開く方法を知らぬ二人には鉄格子をどうにかするなど土台無理な相談に他ならない。そもそも開いている猶予自体があるかどうかもしれず、変に開けば《捕食者》が諸共城内に乗り込んで大変なことにもなるだろう。焦燥が走る二人だが、ふと英一は肩に担いだロープを見た。これだ!

「こいつを適当なでっぱりに括り付けよう!」

「う、うん!」

通れざる城門を前に先に到達した累は最早逃げ場も窮しているばかりだったが、奏美が括り付けられたロープを垂らしたのを見て死に物狂いでこれに飛び付いた。そこへ遅れて百香も城門前までやつ

て来る。百香は息を切らしていたが、城壁の上から奏美が呼び掛けるのを聞いてロープにしがみ付き、これを手繰ってよじ登らんとする。……もう《捕食者》が追い付く。下を見た累がそれに目を血走らせる様に恐懼し、壁を蹴って登った。それでロープが揺れ、百香の手元が狂う。

「る、るい、落ちる……！」

「あ、ああああっ、ごめんな、さい……！」

体勢を立て直しながら何とか登ろうとする百香をこのままにしてはおけまいと英一は奏美を見、彼女が英一を見て頷いたのを見て二人は叫んだ。

「引っ張るぞ、しっかり掴まれ！！」

二人が力一杯にロープを引っ張り始めたことで更に揺られるが、もう登り切り掛けていた累はそこから自力で塀の上へ這い上がった。……百香はふと自らの頭上のロープを見た。古びたそれは今にもすぐそこが千切れかかっているかに見えた。その恐怖に囚われた百香は泣きじゃくって叫んだ。

「やだ、死にたくない、アタシまだ死にたくないよお、助けて、助けてえっ……！」

ぶちり、と音がしたのを四人が皆聞いた。何故こんな時に、と英一は心底運命を呪ったものだ。覗いていた百香の表情が絶望と共に落ちて行く。そしてその下には丁度、《捕食者》の大口があった。奏美が恐ろしくなつてそこから目を逸らした。血が爆ぜ肉と骨が碎かれる忌まわしい音がした。それを咀嚼する音が聞こえる度に既に城壁の影に隠れた累が目を見開いて震え上がりながら座り込んでいる。英一は最後の百香の姿を見た。最早帰らぬ人となった彼女がその視界から消えて暫くずっと眼下でもどもぞと食欲を満たしているらしい《捕食者》を眺め下ろし、やがてただ首を振って背を向け、俯いた。下からは暫く《捕食者》が辺りを徘徊する気配が伝わったが、城門の鉄格子を抜けられないことを悟ったのか登城口の階段をのそのそと、その目立つ大きな足音を立てて降りて行った。三人はその間何も言うことが出来なかった。奏美は崩れ落ちて泣きじゃくっている。累は尚も茫然として意識が目の前から飛んでいる様ですらあった。この中で英一は百香のことを回想していた。遭難初日に初佳と喧々諤々の言い争いをしてしたこと。月子と都市の城壁部で再会した折に二人の男子が示した厭嫌。地下通路でその姿を模した得体の知れない影のこと。或いはそれ以前の平和な部活動の中で見た彼女の姿。特別仲が良かった訳でこそないが悪い奴ではないと思っていた一方、奏美とは不思議と仲が良く時々同席していたら邪険にされていたことはあった。そうした言動も彼にしてみれば女子ならこんなものだろう位には思われたものだった。それがもうただの過去になったと云うこと。彼は今まで遭遇した紛い物の可能性を信じたいと一瞬だけ考えはしたが、ほぼほぼ間違はなく今さっき喰い殺された百香こそが今に至るまで生き延びて来た当人だったと云う確信を不思議と抱いていた。

「こんなの……ないだろ……」

ただ力なく彼はそう呟く。小春の時に続き彼は己の無力を呪うことしか出来ない。この理不尽に対する呪詛じみた敵意を燃やすことのみが彼に許され得る次であるかに思われた。もう誰も失いたくないと思いはするが、そこへ今この場にはいない他の部員、他の仲間、他の友達のこれまでの姿がどこか悪い予感ばかりを与えてくる。果たして皆は無事なのだろうか。とてもそれを信じられないこと自体が何か自分たちの誤断や無為、或いは無力そのものへの懲罰の様にさえ思われるのだが、それでも何とかせねばならないのである。暫く三人の間には言葉がなかったが、努めて英一は今を動かす為に話し掛けた。

「なあ……いつまでもここに居ちゃ、何が起こるか分からない。どこか移動しよう」

「ぐすっ、ぐすっ……、どこへ……？」

「どこでもいい……とにかくここから一度離れよう……」

英一は振り返って再び眺望を見、微かに躊躇いを覚えながらゆっくりと下へ視線を落とした。千切れたロープが弱い風に揺られてぷらぷらと揺れている。そこより更に下に、まだ赤い血飛沫が城壁と路を濡らしているのが見えた。

三人が知る限りこの城内で腰を落ち着けられそうな場所は英一と奏美が地下通路から登って来た部屋しかなかった。鍵を閉め、日没を迎えてほぼ真っ暗の部屋の中三人は寝台に座り込んだ。ぎしりと音を立てる。その真闇が三人の纏う雰囲気が必要以上に重くしていたかのように沈黙が続いていたが、累がぼつりと口を開いた。

「あの、先輩。……助けて下さって、ありがとうございます」

「でも、千ヶ嶽は……」

「分かっています。それでも、お礼ぐらいは言わないと。モモ先輩もお二人が助けようとしてくれたことは分かっていると思います。きつと恨んではないと思いますよ」

「……ごめんね、るいちゃん。こんなにも辛い思いをさせて」

「止めて下さい……もういいんです、これ以上言われたらまた思い出して今度こそ泣いちゃいますよ」

実際、夜目にうつすらと見える累は泣きそうな顔をしていた。微かに鼻を吸る音が聞こえる。それで、英一も奏美もその心情を慮ってこれ以上詫びるのを止めた。三人は殆ど意識する余裕もないままだったがここで漸く空腹を思い出した。そもそもこの遭難以来腹一杯に食べられる機会自体がなく常にそれと戦っていたものではあるが。……三人にあるのは水と一袋のビスケットだけだった。だが食うや食わずやを通して来たらしい累には殆ど御馳走に等しかった。ライトで照らされたそれに涎を垂らしそうな顔をしていたが、それを二人に見られて慌てて顔を振ってお先にどうぞと譲った。三等分されたビスケットは忽ちの内に胃袋に消えた。その後三人は必要な情報を共有し、この夜に探索を進めるべきかを話し合ったがとてもそれをするだけの氣力が無いと云う点で見解が一致した。

「俺が見張りに立ってるよ」

「もうそんなことしてても仕方ないんじゃないかな、英一くん。何が来るかなんて分かりっこないし、本当にどうしようもない相手が来た時、離れ離れになるのは嫌だよ」

心労を感じさせる奏美であったが、それなればこそちゃんと休んでもらわねばならないと思い英一は累に伴を任せ、進んで部屋から出てその前に座り込んだ。疲労感はあるが、自ら抱え込んだ責任感と云うべき奏美や他の面々を守ると云う意欲が努めて彼を起きさせた。夜の沈黙の中で彼は耳を澄ませた。外は風が出て雨が降り出している。城内からは何も聞こえない。死者だけが眠り、佇む城内にあって息を潜める自分たちこそがむしろ異質なのだろうと彼にはどこか感じられた。それは狂気に流されていることではないか、と考える余裕が少しずつ失われていることを示してもいた。

ふと気が付くと辺りは真っ暗で自分は扉を背中合わせにしていた筈なのに床に倒れ込んでいるではないかと英一は気付いた。慌てて跳ね起きると、その目の前には見覚えのある相手が背中を見せていた。それはゆっくりと振り返った。仮面の骸骨。よく見るとその両手には何かを掴まんでいて、それをもまたゆると彼の視界に向けられた。

「！！」

剥き出しの骨に摘まわれているのは小春と百香の亡骸だった。小春のそれは朽ちて二目と見れぬ程変色していたが、まだ人間の形だけは保っていた。対して百香は噛み砕かれたものを無理矢理縫合し直したかのような歪さで、見覚えのある髪型や靴と云った小物がなければ当人であると確信させるに足りなかったかもしれない。……仮面の骸骨は英一を見下ろしてケタケタと嗤った。

「コレゾオマエノ果タシタルトコロ。見事ナリシヤ。見事ナリシヤ？」

「お前……」

「良イコトゾ。ソウシテ燃ヤスガヨイ、憎悪ヲ。我ハ所詮機構、所詮道化ナリシナレバソノ為ニ働イテイルノミ、痛痒トスルトコロモナシ」

思いっ切り殴り付けてやりたいと云う烈しい憤りを英一は感じたものだが、二度目と来ればこれが恐らくこの骸骨が見せる夢、悪夢なのだろうことをどことなく彼は理解していた。

「お前らのやりたい放題のせいで二人は死んだんだ。このままにしてはおかないからな」

「是非ニモ。ソノ瘦セタ手が締メ上ゲラルルハタダ生者ノ首ノミト未ダ知ラヌ愚カシクシカシ愛オシキ姿ハ、次ヲ産マレ落トス良キ苗床トナロウ」

「どう云う意味だ」

「意味ナド意味ナシ。……ソレハ、流石ニ意地ニモナライデカ」

「……」

「語ラセント欲スルカ。然ラバ足搔クガヨイ。ソノ程度ノ相応シキヲ認メタラバ、我トテ語ルニ値ウト信ゼルナリシカラナ」

「いい加減なことを言いやがって」

「フフフ……サア、標ヲ握ラセテヤロウゾ。疾ク起キヨ。再ビ悪夢ノ内ニ。間モ無クマタヒトツノ命ガ沈ミ行カン」

何だって、と思った時には仮面の骸骨はふっと消えて、その手に支えられていた二人の亡骸がぼとりと落ちた。百香のそれは骨格が壊れているせいか手足はあらぬ方向に曲がっていた。その余りにも無残な屍の前に立って英一は何か言葉を探したが、ついぞ何も思い至らずただ無念そうに、二人の冥福を祈って瞼を閉じた。音もなく二つの屍は闇に沈んだ。それから己の視界もまた闇に吞まれるのを英一は感じた。

英一が目を覚ました時、既に夜闇は微かばかり払われつつあった。早朝だ。彼は自分の背中に扉があることを確かめるとすくと立ちあがって扉を静かに叩いた。しかし誰かが近付く気配はなく、耳を凝らすと寝息が微かに聞こえる。あの仮面の骸骨が言うところを信じるにしろそれを根拠を示して二人に説明することは困難なことは今回も変わらなかった。それで英一は、鞆に入っているものを探ってメモ帳が残っているのを見つけ、一枚を破いて書置きを残した。宛てはないが、どこへ向かうべきかは少しだけ想像が彼には付いていた。沈むと云うなら地下だろう。もう一度あの地下通路に、なるべく早く行って帰って来る、と。半ば勇躍する様に英一は走った。間に合え、と頭の中で唱える。――まるで狙い澄ましたかのように彼が階段へ駆け込もうとしたところで声を掛けられた。

「ちよっと葦杜、どこ行くつもり？」

初佳の声にどきりとして彼は足を止めた。慌てて振り返った先には半ばが黒く溶けた様な初佳の、初佳の様な何かの姿があった。英一は何てことだと憤った。

「こんなところで構っている場合じゃないんだよ、来るな！」

「あんた、先輩にそんな口の利き方していいつもり？」

「俺の知ってる十慧先輩はそんな人じゃない！」

英一は振り切る様に階段を駆け下りた。その背中から嘲笑うような嗤い声が投げ掛けられた。

「なら、精々確かめなさい。私が、待っているわ」

英一は敢えて振り返らなかった。危険だとしても今だけは構ってなどいられないと。階段を下りて地下一階に達した彼は尚も走って廊下を駆け抜け、宿直部屋へと飛び込んだ。もうすぐそこだ、もう直ぐ。

「……え……」

が辛うじて微かに首を、視線を動かして彼を見た。泡を吹きかかった口で、辛うじて声を上げる。

「たす、け、っ……」

初佳の全身が痙攣し、その力が抜けてだらりと垂れ下がった。侑人は尚も暫く見開かれた目と禍々しい口から歯を見せて声もなく笑っていたが、初佳が力尽きて暫くしてやっとその事実気付いた様に彼女を解放した。どさりと床に崩れ落ちた初佳はよく見ると着衣が乱れ下半身は何も着ていなかった。いや、その辺りに剥き取られて放り捨てられていたのだ。下半身何も着ていないのは侑人も同じだった。……英一にとり形容したくない嫌な匂いが室内に立ち込めていた。

「やあ、葦杜君。こんなところで会うなんて奇遇だね。どうしたのかな」

「ほ、甫土、せんばいつ、それ……」

震える指で英一は初佳を指し示した。彼は頭の中では彼女を直視したくなかったのだが、目の前にある状況はその思考すら麻痺させて逆に却って冷静じみた対応をさせた。これに侑人はくすりと笑った。

「ああ……初佳はさ、怯えてたんだ。ここいらは化け物ばかりだからな。ずっとはぐれてたけどやつと会えて、それでも怯えてたからちよつとね、慰めてやらなきゃって思ってたさ」

その口調は如何にも彼氏気取りのものだった。確かに英一は侑人が振られて以降も初佳にずっと未練を抱えていて何とか復縁したいと考えていたのを洞察してはいたものだ。しかしその結果がこれと云うのはむしろ行き着くところまで行き着いたとしか説明のしようがなく、その上で彼がかくも平素他者に接する様な穏和な顔をしてこの様なことを口にすることは理解を絶しているに近かった。実にそれは狂っていると言うばかりのところだった。英一はその狂気と初佳と云う自分自身にとって大きな山を思わせる才色兼備の麗人が目の前で息絶え屍を晒していると云う事実に挟撃されて次に何を言えばいいのか分からず絶句したままだった。それ眺めていた侑人が見かねて助け舟を出す様に言う。

「英一君もここまで来るのに苦労しただろう。この不気味な地下通路を明かりもなく通るなんて大したもんじゃないか。どうかな、今後を見据えて一緒に行動しないか？」

「あ……あ、……」

「英一君？ ……どうかな？」

その微笑みは不気味に過ぎた。それを見せられて英一は微かに思考が回った。現実逃避と云うべき方向へ。彼は叫んだ。

「ふ……、ふざけるな！ 十慧先輩を殺す様なお前が甫土先輩なものか、正体を見せろ、化け物お！！」

「英一君……僕は偽者なんかじゃない。甫土侑人その人だとも。大体偽者なんて一体どこにいたって言うんだい？」

「いい加減にしろよ……！ こんな、こんなところで、俺の知ってる甫土先輩がこんな真似をする筈が……！」

「……君はこんなに物分かりが悪かったかな」

本気で分からないと云う風に頭を振る侑人に英一は持っていた鋸を構えた。震える手で彼を見据える。その内心は最早この相手が本当に化け物であってくれと云う願望で染まっていたまともな思考が回っていないに等しかった。恐怖が、それに立ち向かわねばと云う条件反射的思考を呼んで彼にじりと一歩踏み出させる。侑人はそれを見て少しだけ顔を顰めて、傍らに打ち捨ててあった錆びた剣を躊躇いなく掴んだ。……足音が近づいた。それに早く気付いたのは侑人で、英一はその肩を掴まれるまでその存在に気付けなかった。

「おいお前葦杜って言ったか、ここで何をやっている！？」

その怒声はひどく長く耳にしていなかに思われた兼輔のそれだった。英一は驚いて彼を見た。怒気を孕みながらも理知を湛えたその瞳が彼を見据えていた。それに見つめられると英一の心に巢食つ

ていた狂気的な感情が、収拾の付けようもない恐慌が渦を巻いて排水口に消える様に収まっていった。英一はゆっくりと鋸を下ろした。

「坊之威、さん、でしたか……ありがとうございます、ございます」

「礼はいい、状況を説明しろ」

「英一君……この人、どちら様？」

一遍に質問を投げ掛けられて俄かに英一は窮したが、目の前の状況をして何をせねばならないかを考えると答えは知れていた。英一は自分が見たものを包み隠さず語った。兼輔がちらと地に崩れ落ちて動かない初佳を見て顔を顰め、侑人を睨んだ。

「何ですか、見ず知らずの他人にその態度は」

「下半身丸出しで堂々立っている馬鹿に言われたくないわボケが」

言われて侑人は一瞬恥ずかしそうな顔をした。しかしそうして視線を下に落として彼は初佳の屍を見、固まった。そこからゆっくりと、ギギギと音でも立てそうな動作で彼は英一の方を見た。

「えいいち、くん？ 君に分かるかい？ 彼女に振られてずっとぞんざいにされて、無視されている様な扱いを受ける屈辱を」

「何を……馬鹿な。先輩ならそれだって乗り越えて新しい道を歩める筈だっただろ！」

「それが必要か？ ん？ ……でもそんなことより俺には許せないことがあってね。初佳が、他の誰かに靡いたりモノにされたりすることだ。俺以外のやつものものに、なることだよッ！！」

初佳を締め上げていた時と同じ禍々しい笑みを彼は浮かべた。ハハハハハハッ、と彼は嗤った。普通ならその風体から滑稽なだけだが、この場にあつては英一と兼輔にただ狂気だけを感じさせた。

「だから、モノにした、だからッ！！ 初佳は俺のものだよ、俺のモンだよ、誰にだって渡しやしないさ、ハハハハッ！！」

「……こんな人でなしがッ！！」

兼輔がそう凄んだが侑人は意にも介していない。ああ、この人はもう永遠に元になど戻り得ないのだ。死んでいった者たちとは全く違った意味で。そう考えた英一の内にはふつつと、怒りが沸き立つ。先に兼輔が叱ったことによって固め直された侑人への怒りが理性の凝視を伴いながら渦巻いていた。

「甫土先輩は十慧先輩を殺したんだ。殺したんだ！ あんたの掌にはもう永遠に戻ってなんか来ないんだ！ 分かれよ！」

「そうか。そう云うことでもいいよ。俺は初佳をモノにしたんだから。で、次はどうするつもり？」

実際ここで侑人を殺す、と云う意思は英一にはなく兼輔にもあるとは言えなかった。初対面の筈の男を躊躇いなく殺せるなら兼輔も大概狂っていると説明されるべきだがこの男には未だその様な域の狂気は抱かれていないらしい。そこには幾許かの安堵を英一に抱かせた。

「十慧先輩の遺体を渡せ。弔わなきゃ」

「は？ 初佳は俺のモンだぞ。お前はいい後輩だけど彼女を渡す程の義理はないね」

「死んだ人を弔うことがおかしいものか」

英一は再び鋸を構え直した。傍らの兼輔がそれを見て握っていたハンマーを構える。不愉快そうに侑人は英一を睨み返し、言う。

「お前、そんな後輩だったか？ そんな暴力に訴える様な奴じゃないって分かっているつもりだったから今まで世話焼いてやってたんだぞ」

「暴力に訴えられたくないなら、大人しく渡して下さい、先輩」

「……」

侑人は掴んでいた錆びた剣を英一にふっと向けた。その挙動は明らかに素人だと英一は思った。いかな年長の男子とてただの美術部員に過ぎない彼に特別の技芸が備わっているものではない。……英



一がじりじりと近寄るのに耐えかねた様に、或いは初佳を奪われると云う観念に圧迫されたかのように侑人は雄叫びを上げて剣を突き出した。その動きはやはり素人であった。英一は父親の指南の下剣道を習って来たが故に彼の動きは驚く程ゆつくりと映った。勿論殺し合いの術を習った訳ではないが故の緊張はこの場にあつたが、彼はそれすら易々と無視してその剣を鋸で払い飛ばした。剣は半ばで押し折れ、先がはじけ飛んで壁に当たり、落ちた。態勢を崩した隙に英一は鋸で侑人の胸を指した。いつでも突き飛ばせる。彼の鮮やかな手並みは兼輔に何かさせる由もなく、目を丸くさせた。

「十慧先輩の遺体を、渡して貰います」

「……」

微かな沈黙の中で侑人は眦から涙をこぼし始めていた。完敗を前に屈辱に濡れていたその認識が流された涙。惨めだと英一は思った。

「う、うああああああああっ!!」

侑人は狂乱の叫びを上げて地下通路へ駆け込んでいった。暫くその声がこだまするのが聞こえたが、それも絶えた。英一には追えなかった。憐れむならせめて、ここで死なねばならなかった見知った相手に対してこそだろう。彼は無残な姿のまま胡乱に視線を宙に放り出している初佳の亡骸を見た。あられもない格好となっているのがいたたまれず彼は自分のカッターシャツを脱いで彼女に被せ、その臉を閉じてやった。兼輔はこんな英一を見守ってやることしか出来なかった。その後辺りに散らばったものから、初佳のものを探して故人をせめて見れる程度に綺麗にしてやった。その作業は二人にとって驚く程淡々と、言葉もなく進んだ。